一日一談

特230
769

始

特23
764

松軒

一日一談多聚語
後素後素實驗語
寄得字句守
後嚴至律一要記
實說
爲文之本也者
與之兒於南

415
131

はしがき

回顧すると遠い昔話であるが、私は明治四十一年の正月から殆ど半歳の間に亘り『中外日報』紙上に「一日一談」と題して、隨時の感想を簡單な文章に認めて掲載し、それが積りて百題となつた。所が當時交友間で、それを纒めて一書とせよと頻りに勸められ、殊に今は故人となられた住田智見師が是非にと勸めらる。それで私も其の氣と成つて、父を訪れて其の意を語り、且つ其の切拔帖を呈して父の批正を請ふた。父は私の願望を容れて逐條に批判を下し、且つ會心の挿畫を揮毫して與れられた。

然るに其の刊行に當つて、父の批判の文を附加するか、否かにつき深甚の考慮を爲した。それは一旦刊行して世に出すと、孰れは他の批判を受ける、それが若し萬一父に累を及ぼすやうなことがあつてはならぬと感じ、遂に父の批判文を割

愛して、私の起稿せる分のみとし、明治四十二年の秋、世に出した。尤も此の小冊子は今は絶版となり、發行所にも一冊も無い。

所で、今次「獨語錄」を刊行するに當り是を思ひ出し、父が若し存生せられてあつたら「獨語錄」に對しても、亦批判の筆を執つて注意を與へらるゝならん、と其の追懷の情の止め難きものあり、それと同時に父の慈愛の至情溢るゝ一日一談の批判文を埋藏するに忍び無くなり、茲に之を刊行して其の恩愛の至情を我が兒孫に知らしむることゝした。從つて之は廣く世に出す物では無く、只我が一族の間に頒たんとする物である。只今原稿を整理して通讀すると、私の「一日一談」が、又其の儘父の「一日一談」と成り、恰も父子合作の如き觀を爲し、私としては實に思ひ出深い一書と成つた。

父が兒等に對して如何に熱愛を有してをられたかは、私が「一日一談」の草稿を其の膝下に呈したるものに對し、次の如き注意をして下さつた事にても解せらる。

一日一談印刷に關する余の希望

一。本書の起草は教務の餘暇筆を執りて、日刊新聞へ日々投書したるものにて最初より終始一貫して系統的に書きたるものにてはなく、其の日〳〵の感想を披瀝したる談片なれば、之を完結後冊子として世に公にせんには、其の大體に於て各題の要旨を區分して讀者の便利を計ることを要す。

一。本書は前述の如く日々の感想を起草したるものなれば、文體一定せずと雖も、日刊新聞紙上にてはそれが却つて讀者の心氣を一轉して愛讀せしむるの要ありしと雖も、冊子としては終始一貫の文體にせざれば、或は讀者をして却つて嫌惡の情を起さしむるの恐れあらんか。依つて漢文和譯體か、又言文一致體か、孰れか其の一に歸する方がよろしからん。

一。本書因談片の蒐集、すなはち語錄なれば、何れも短句にて一文毎に長篇の如く、抑揚頓坐首尾照應等の文章の波瀾なく、所謂短刀直入又は寸鐵殺人底

の適切氣概の言句を主とするものなれば、其の字句洗練を要すること論を俟たず。然るに新聞紙掲載の分は往々字句の洗練を缺くものあつて、所謂萬字に富みて、一字に貧しと云ふ嫌ひ無きにしもあらず、其の一二を云へば、雅言になじみて語氣弱く、俗語に落ちて氣韻少なく、共に文章の品位を失ふの嫌ひあり、そは文中、取つていふの言の如きは、短句の氣力を弱くして宜しからず、取つて云つてとの文體に顯はして、言の詰りたる方語氣强からんか。又ぬば玉の暗夜、或はすぐしての類は、雅にして却つて語氣弱く、これらは一寸先きもわからぬ眞くらやみとか、又は空しく過ぎてとか、すごしてとか云ふ方が廻り遠からずして宜しからずや。或は氣慨ある語中に、私共とか、私が、と云ふよりは、吾人とか、我輩とか云ふが强からんか。要する所短句の語錄には、其の結尾の一語最も氣力ある字句を用ゐて、之がため讀了の餘意に、快樂なる連想を喚起せしむるを要す。此の快樂なる連想が、本書看讀の意が永く實踐躬行の動機となるものなり。そは余が多年の實驗に徵して知る所なり。

一。本書各題毎に余が所感を附記すと雖も、敢て批評的に記したるものにあらず、余固淺識不才にして文學の素養なければ至當の批評を下す能はず、唯余が此の各題に就て所感の連想を記して、兒が他日各題を演繹して人と共に語らんとする時の資料に供せんがためのみ。依つて文章の拙劣字句の不當なるものは、兒の改削を用ゐて誤謬なからしめんことを請ふ。

一。終りに臨みて一言せんと欲するものは他なし、余が二十年前初めて著述の志を立てゝ其の成功を二十年後に期した。然るに本年は恰も其の成功の期として漸く初志を達したり。然れども其の成功なるものは、他の人々の云ふが如き遠大の志操にあらずして、僅かに幼稚の文をかきうるに在り。然るに本年に至り、前に一丸(私の次弟)の「教誨一年間」なるものゝ聽記に愚見を附記し、

今亦此の「一日一談」に老婆心を附記することを得るに至りたるは、萬金を遺して子孫に與ふるよりも、余にとつて此の一語を附記するの喜び萬々なりとす。兒等學歴ある者の眼には、固より見るに足らずと雖も、余が中年已後の志操を撓まず兒等と共にしたる父子の愛情に於て、いさゝか見る所あらんかと信ず。請ふ之を諒せよ。

明治戊申八月十日　　病父しるす

以上は父が「一日一談」の原稿の冠頭に記入されたる熱愛至情の注意書である。私は今日之を繙讀し感涙の止め難きものがあるのである。當時私は此の父の注意を尊重し、各章の文字を改訂して刊行したことであつた。而して今其の書は前述の如く絶版となり、私の手元に只一本あるのみである。

私は今次此の手元の一本と、父の批評の記入せられたる草稿の二書を檢討して本書を作製することゝしました。所で其の文字は生硬にして、其の言論も亦取るに足らぬものゝ多分にあるを認める。然れども既に一旦世に公にしたるものなれば、之を塗抹することを許されぬで、一百題中事布教に關する一分を削り、其の他は多少の字句を修正して原文の體形を損せざることゝした。從つて今日の私の文體とは全然其の文體を異にし、私自身すらも、之が私の文章であるかとの感を惹起し、殆ど隔世の感を懷いてをるのである。併し只茲に一事の記すべき事は、其の思想の上に於ては、今も多く變ることなきことであり、自ら歩み來つた足跡を顧みてあゝさうした事も談じたことがあつたと、今更に數十年の過去を追懷して、老後の慰安と致してをる次第である。

昭和十六年一月中浣　　樂山莊にて　著者識

一日一談

お待ち
油ものの教伝まて
出く
本日段かあと九一段
右之通
翁

一處世

。人生は理想に始まり、獨斷に驀進し、斯くて自然に屈服し終る。

。青年時は理想が勝ち、壯年の頃は獨斷が多く、老年期に入ると遂に自然に服從する。

。自然に反抗する者は社會の外に捨てられ、これに服從する者は常人の生活を爲す。唯夫れ是と同化し、而も能く是を觀破する者は、始めて社會の表に立ちて光を放つことを得る。

病父曰。獨斷に二種あり、理想に訴へ、實際に質し、判然明日の獨斷は其の處置宜しきを得る。之に反し、自己の偏見に任したる曖昧模糊なる妄斷は、常に實際と衝突し、十中八九

失敗する、所謂我儘勝手の遺損ひなり。

。他人の世話をするは、我身の世話をする事と思へ、我身の世話は死ぬ迄する。他人を世話して半途に中止するときは、却つて怨みの種を蒔く。最後迄の決心がつかぬ事には、始めより手出しせぬに若かず。

。世話は誇るべきものでなく、樂しむべきものである。誇る時は賣恩と成る。唯夫れ是を樂しむが故に、假令へ相手が感謝せずとも我に於て毫末も不滿がない。

。世話は注意に始まり、金錢に半ばし、一身を引受くるに終る。

病父曰。コセ〳〵したる小世話の如きは暫く措き、事の大なる世話を爲さんに、其の事の十中八九成功の見込み立たんとするとき、被世話者は、世話者に對して厭嫌の情を起さんとする傾向が見ゆるものである。之は其の事に對する成功の徵候なれは、此に於て强ひて執拗の念を挾まざるを要す。若し成功の終りに至るも、尙ほ世話者に凭れる者は大概薄志弱行の徒なり。

。文化が進んだと云ふが。さりとて吾人は日夜それに鞭撻せられて、四六時中寸暇無く追廻さるる。

。昔の百里は今の十里と變じ、昔の一時間は今の十分となる。長き間には多少の道草を取るべき閑暇もあるが、短かき時間には斷じてそれが許されぬ。

。旅路は汽車に追廻され、用務は電話に驅り使はれ、眠時は電燈に奪はれ、寸分の暇も無く、匆々として奔命に疲るゝのが今の世渡りである。是ではたまらぬ、と小言を云ふ者は、忽ち落伍者となつて社會の外に捨てられる。

。今の文明は壓迫と痛苦が伴ふ。是では眞の文明と云うことは出來まい。

病父曰。物質的の文明は世界を縮少す。精神的の文明は萬物同體の廣大心と成る、故に兩者相俟つて始めて眞の文明の世界を出現す。反之、若し其の執れかの一方に偏する時は、豐年の際に路傍に餓死し、又は鐵道往生或は河海溺死の悲境に陷るに至るべし。

又曰。桃栗三年柿八年、苟も事を爲さんとする者は、其の成熟の期を待つを要す。然るに今の世の人多くは成功の期を急ぎて、却つて文明の壓迫に苦しむものゝ如し。壓迫一概に厭ふべきに非ず。梨の木の枝を曲げて果實を豐かならしめ、麥の畑を履んで豐作の基と爲さしむる事あり。思はざるべけんや。

。火を消すには水が要る、水を溫むるには火を要する、社會の事物は一物として何等かの要求せらるべき德を有せざる物はない。されば社會が己れを用ゐざると て嘆くべきでない、それよりも社會の要求に應ずべき實力を養成すべきである。

。彼の徒らに社會が己れを用ゐざるとて泣言を述ぶる者は、自ら己れの不器量を告白するものである。これ實に恥づべきの至りである。

病父曰。然り〳〵。然りと雖も社會の要求なりとて頭に乘つて反省を忘れ顚覆するも、亦自分の不器量を告白するものなり。

。人は一度は社會の表舞臺から退かねばならぬ時がある。

。人は一度は家庭の表舞臺から退かねばならぬ時がある。

。人は一度は妻子の愛情と別離せねばならぬ時がある。

。汝の四境の物より別離して孤身獨行者となる時、汝は何に依つて汝の心身を樂しましめんとするか。

。此の問題の解決の出來てをる者は、變に際して驚かぬ、事に當つて二の足を踐まぬ。吾人は是非共之を解決して、安全なる退路を開いてをかねばならぬ。

病父曰。失意の時に進路を見る事の甚だ難きと同時に、得意の時に退路を見ること亦同じく難中の難なり。何んとなれば、世間上下貴賤を論ぜず、人生一代の末路に及んで煩悶苦惱に沈む人多きが如し。況んや棺を蓋ふて事定まる前に於て、來世に對する進退二路の方針確立するに於ておや。

。人生は旅の宿りとは古聖の訓言にして、萬古不易の眞理なり。

。人生の旅は單獨の旅にて、他を伴つて己れと同一の道中を爲さしむることは出來ない相談であり、獨生獨死獨去獨來である、と覺悟しなければならぬ。

。此の道中に對し、倫理は一夜の宿に於ける德義を敎ゆるものであり、宗敎はそれ以上に尙ほ己れ一人の道中の落居の都を敎ゆるものである。從つて倫理と宗敎とは互に相交渉する所あるも、而も其の領域に截然たる區分があり、決して相犯すことを許さぬ。

病父曰。平等と差別は恰も水波の如き關係を有す、一にして二、二にして一、是即ち宇宙の眞理なり。依つて人、常に此の理を鑑みて萬事を處理すれば過ち少なし。然れども若し惡平等に陷るときは、所謂味噌糞一處の弊害を生じ、惡差別に傾くときは、常に中道を缺くの大害あり、省みずんばあるべからず。

。成功は自ら進んで求むべきでない、たゞ自重して周圍の推薦を待つべきだ、進んで之を求むる時は、反つて他の反感を招きて手に入らぬ。自ら抑遜して之を辭する時は、反つて與へらるゝものである。

。自重は成功の第一義にして、抑遜は常に天與の賜賚を來たす。事を爲さんとする者は、深く此の邊の消息を解しなければならぬ。

病父曰。成功は急ぐべきものに非ず、一代を期すべきものなり。然るに今の世の人は之に反して自ら成功の遲きを卿ちて、他の成功を掠奪せんとする弊風流行するもの丶如し。嗚呼悲しい哉。

。事務に携はる者は、須らく他の一面に於て必要なる讀書を嗜むことを要す。學藝に從事する者、亦必ず他の一面に於て事務的の考慮を養ふことを要す。

。單に事務的才能のみを發揮して讀書を怠る時は、不知不識の間に俗臭に薫ぜら

れて人格の光輝を失す。單に學藝のみに耽つて事務を顧みざる時は、眼界狹量となり、社會の大勢に通ぜざる者となる。

。されば兩面の修行は社會に立つて事を爲さんとする者に執つて、一日も怠つてはならぬ事である。

病父曰。複雜多岐の世に於ては、何事を爲さんとするにも、分擔法に依らずんばあるべからず。されど其の分擔責任の事態と內外表裏主伴等の關係は、是を知悉せざるに於ては、何事も成ずることを得ざるは理の當然なり。

。譬へば高きに登るが如し、登るに從つて疲勞は加はる。而も一歩々々眼界を廣濶にす。麓にては此の眺望は得られぬ。人並に食ふて寢て起きてをつては、人並より進まぬ。

。高嶺の雄大なる景色を眺めんと欲せば、切々と登るに若くなし。社會の表に立

たんと欲せば、何よりも勉むると云うことが大切なり。

病父曰。登高自卑は事を爲すの順序なり。然れども登高の極、山の雄大に迷ふて下路を失ふは、却つて身を誤るの恐れあり。

。熟慮の結果、決心したる初一念の希望は、刻下に斷行して敢て或は之を後念に推移せしむる勿れ。事の難易と其の成敗の如何の如きは問ふこと勿れ。

。此の斷行の勇氣を缺きて前後を顧慮する時は、忽ち妄念に閉覆されて、必ず實行の機を逸する。人の中に在つて一頭地を抜くと否とは、此の斷行の如何に基くものなり。

病父曰。判斷、決心、處置は事を爲すの要訣なり、若し此の三者を全ふせざるものは、事の成功を期し難し。然れども斷行と輕卒とを誤つて、世の物笑ひとなるもの少なからず。故に唯要する所は明理の斷行にあり。

。結果に驚く勿れ、事に當らば必ず先づ其の原因の如何を考察せよ。此の一事少なるが如きも、而も能く一切の妄念を拂ふて光風霽月の心境に出でしむる。

病父曰。結果は勢力の發現する所、原因は勢力の潜む所、結果は覩易し、原因は覩難し、今の世に於て事業を起す者、多くは結果の盛大を枚擧し來つて之に擬し、而も十中八九其の中途にして倒る。これ其の原因を檢討せざるが爲なり。之に反して其の原因を探求し來れるものは、其の終りを善くするが如し。然れば原因は如何に考察すべきか。蒔き立ての種子に灌漑培養を忘らざるが如くせざるべからず。唯要する所は、所謂下手の思案は休むに似たる徒勞を避くべきにあり。

。人事百般、むつかしいと云へば、むつかしい。入込んだと云へば、入込んでをる。而も他の一面より觀察すると、容易至極のものである。

。何の事は無い。事に當りて判然と、諾か、否かの一つを言明すれば、即座に解決さるる。

病父曰。諾否の明決は事を爲すの要訣なり。然れども事態の眞相を看破する先見の明ある者にあらざれば爲し難し。されば諾否の容易は、平素の鍛錬いかんにあり。

。張り過ぎると忽ち絃が切れる。さればとて、張りが足らぬと、好き音色が出ぬ。這般の消息理窟以外の熟練を要す。

。人生は猶ほ廿五絃の琴の如し、絃の張具合一つで苦ともなれば又樂ともなる。

病父曰。經寸餘の竹を七八尺切りて、其の兩端を紙片を穿ちて通し、人をして持たしめ、木刀を以て其の竹の中央を一氣に切斷するに、其の紙破れずして竹は忽ち切斷せらる。唯其の呼吸は木刀の先三寸の度合と、術者の氣合と相一致するによる。琴絃の音調も亦之と同じく、人世の交際も亦同じく此の過不及の呼吸を能くするに在り。

。前念後念、共に汝の本領を發揮するの思ひを以て充實せしめよ。分時にても間隙があると、忽ち魔風殺到する恐れあり。

。仕事の世話しき時は、立ちながら飯を食ふても小言は云はぬ。而も仕事が閑暇に成ると、三度の食事に迄、何に乎と小言を云ひたくなる。

。世話しきは藥なり。閑暇なるは毒なり。殊に小人輩に於て、其の然るを見る。

病父曰。自己の天職を怠つて時間の餘裕を貪る、これ眞の閑暇にあらず。背水の陣頭に立つて尙自然の風光を愛す。所謂英雄閑日月ありで、これ眞の閑暇なり。余は老後肺病十三年不治の病敵と鬪ふて、此の閑日月を得たり。樂しい哉。

。人生三分の外敵を持つと云ふことは、幸なる事である。さすれば心に張りがあつて奮進の勇氣が横溢する。

。若し夫れ四境の者が悉く己れの味方であると、忽ち弛みが生じ、不覺失敗の種を蒔く恐れあり。

病父曰。余が從來の實驗に依るに、凡そ事を爲さんとするに、味方の言のみを容れて敵の意を察せざる者は、十中八九は所謂、贔負の引倒しに成るものなり。

。一家一族が悉く己れの命の儘に動く者と思ふのが抑もの誤りなり。悉く是れ自己の目的を有する旅客の寄合なり。假令へ形式の上に於ては一致の生活は爲しても、心は各々別々なり。

。されば己れの道中を誤らぬやうにして、他の相客の所作に附いて廻るな。誤つて其の口車に乘ると頓んでもない所へ導かれる恐れがある。

。經に曰く。獨作諸善不爲衆惡と。吾人は如何なる場合に在つても、此の心を以て心としなければならぬ。

病父曰。余は一生の過半、旅行生活を爲して此の味を知る。肺十三ヶ年隔離病室に獨居して此の樂しみを得るも是が爲なり。

。落馬の際は男らしく落ちよ。未練を出して鬣にしがみつくこと勿れ。然らば斷じて馬に蹴らるゝ恐れは無い。

。人生一代、落馬の如き厄難を受くること甚だ多し、其の際斷じて未練がましき所作に出づる勿れ。されば必ず再び浮び出る瀬あり。

病父曰。余曾て本山の教務を帶びて東北を巡回中、雪中に落馬し、次に朝鮮の梵魚寺參詣の歸途に落馬し、九州豐後の臼杵にても亦落馬して能く此の味を知る。此の說眞に然り〳〵

。成功者の功名談を聽くよりも不成功者の失敗談を聞け。これ成功の要訣なり。

。功名談は、己れを忘れて屆かぬ花にあこがるゝ恐れあり、斯くて手を出すと鵜の眞似をした烏となるべし

。唯夫れ他の失敗談に鑑みて、己れを顧みて進む時は萬一の誤りなし。石橋を叩いて渡るよりも安全なり。

病父曰。成功と失敗とは表口と裏口との如し、共に一家の入口なり。表口より入れば玄關より進んで奥座敷に入る。裏口より入れば先づ炊事場食堂等より入る。室内の粧飾全く相表裏す。苟も志あるものは此の義を味ふべし。

。宿賃は、宿屋の主人の爲に拂ふのではない、己れの面目を保つ爲にするのである。拂はざるときは喰ひ逃げの汚名を蒙むる。

。吾人の日常の勤めも亦これ人生の宿賃の支拂ひである、從つて要請の有無に拘らず、己れの面目を保つ爲に日夕勤勞しなければならぬ。彼の相手の如何に依つて其の行動を二三にするが如き、實にこれ淺ましき喰逃根性と申すべきである。

病父曰。吾人の身體を生理上考へると、働くことを以て組織せられてある。身體內部の諸機關は睡眠の間と雖も休止せず働いて居る。精神も亦無何有の佳境に遊んで、睡後一場の笑話の材料を造つてをる。是に由て之を觀るも、吾人は天職として身心共に至誠の業（はたらき）を盡さざるべからず。

。借錢は早く拂ふに德あり、貯金は遲く引出すに利あり。

。あらゆる困難は、孰れも皆これ精神上の借錢なり。我等は快よく其の苦難に堪へて、茲に始めて一つの借錢を拂ひ終るものなり。

。仁慈の行動は總て是れ精神上の貯金と成る。されば これを行ふに際しては、斷じて他の感謝を欲望すること勿れ。苟もそれを爲さば、刻下に貯金の性質を破滅すべし。

病父曰。拂ふ見込みある借錢は、多く借つて多く德を得る。融通の利く貯金は、厘毛を積んで遂に大利を得る。然るに拂ひ根性の無き借金は遂に赤貧となり、融通の利かぬ貯金は、生涯を猫に小判の守錢奴と成り了る。吾人は精神上に於ても是に類すること少なからず。

。俺の金を俺が消費して遊ぶに、何の憚る所がある。寢るも起きるも俺の勝手であると。これ一應の道理あるが如く聽ゆるも、而も大いに誤つてをる。

。人生には絕對の自由なるものは無い。人事も天然も共に皆相對關係に依つて成立してをるからである。世は男のみでは生存することは出來ないと同時に、女の

みにても渡ることは出來ない。兩性相俟つて圓滿なる人生を形ち造るのである。

。社會の根底が相對的のものである限りは、人間のみが獨り絶對の自由を欲望すると云ふことは、實に大なる誤謬である。

病父曰。專横を極めて自由を求めんとする者は、恰も革袴を穿つて荊棘の中を走るが如く、自ら創つかずと雖も、山野をあらす恐れあり。謙遜を守つて自由を得んと欲するものは、恰も自轉車に乘つて大道坦々砥の如き所を走るが如く、自他妨げなし。偶ま道に凸凹ありと雖も、車輪の護謨袋の作用に依つて顚覆の憂なく靜かに進むことを得る、これ眞の自由に非ずや。

。草履取りの卑職に在つて、而も其の職分を卑まず、寒天に早起して主人の草履を背に入れて溫めたる藤吉郎は、忽ち信長に拔擢せられて、他日太閤となるの地歩を占むることを得た。偉人は如何なる境遇に在つても、必ず一頭地を拔く。

。由て思ふ。己れの職分が卑いとか、賤しいとかと云つて、彼此れ小言を併べる者の如きは、假令へ如何なる要職を與へても遂に何事も爲し得ざるべし。苟も眞の力量を有する者は、如何なる境遇に在つても必ず其の異彩を放つ。

。小言を云ふよりも腕を揮へ、これ人生に處する第一要義なり。

病父曰。余が東京石川嶋監獄に在勤中、日々退廳毎に途中にて職工場の火夫が全身黑燻りにて勇ましく退場するを見て、自ら其の天職を盡さんことを思ふ良教訓と感じたり。貴賤上下を撰ばず、自らその本分を盡す者、即ち眞の人物なりと、余は尊敬す。

すむ世に
おく山かちゝ
ふる
世乃人ハ
猫乃頭に
かみ袋哉

二　修　養

。過去に愚癡なく未來に欲を起さず、現在の一念に全力を盡して己れの本分を務むるときは、多くの不平と苦悶より遠ざかって、昌平安樂の悦びを得べきなり。

病父曰。獅子は小獸を搦むにも全力を盡し、鷹は小禽を捕ふるにも全力を注ぐと云ふ。茲に云ふ、己れの本分とは此の外に無し。由て思ふ、人生、活氣なき生活は、所謂薄志弱行に陷つて、遂に樂をして苦に轉ぜしむるもの、比々皆然り。

。何と力んでも我身一つが思ふやうにならぬものである。嫌な病氣も出づれば、思はぬ失敗もする。されば、我身以外の他人が、我が思ふやうに成らぬのは當前である。それを彼此れと云ふのは、愚かなる至りではあるまいか。

病父曰。余が實驗によるに、我身の思ふやうにならぬが、世の眞相なりと思ひ知ると、始めて我が分に應じて思ふやうなる道の開くるものなり。

。强ゆべからず導くべし。導かんと欲せば先づ歩め、これ指導の地位に立つ者の極秘とす。

病父曰。健足にして而も徐歩を要す。

。夜具は上を重ねるよりも、下を重ねる方が溫暖である。人も亦然り、上に阿諛するよりも、下に慈愛の心の厚き方がよろしかるべし。世に立つて事を爲さんと欲する者は、這般の點に對して猛省しなければならぬ。

病父曰。上に阿諛する坊主根性と、議員選擧の運動根性とは、いかんとすべき乎。

。如何程重襲(かさねぎ)しても、腰部より以下を溫めざるときは、屹度逆上して昏倒するものである、上と前のみを見て、己れの足下を忘るゝ者は、一時は榮へても、必ず轉落する。我等は常に刻下の一念を大切にして、他日逆上せざるやうに心掛けねばならぬ。

病父曰。下の冷ゆる者逆上すと雖も、なほ時間を要す。飽食過飲衞生を忘るゝと短氣の忿怒、所謂ムクロ腹を立つるは、これよりも一層甚だし。尙ほ此の外自負高慢、我身買被りの逆上は、今日を誤るは勿論、遂に一生を誤る。殷鑑遠きに非ず、注意せざるべからず。

。道德の中に衣食あり、と敎ゆるときは、忽ち佛を賣つて衣食の資とせんとする者を生ずる。衣食足りて禮節を知ると說くときは、忽ち衣食に走つて佛を忘るゝ者を生ずる。

。道を談ずること亦難いかな。止むなくば兩端を叩いて其の中を取るべきか。

病父曰。道を談ずるの難きにあらず、自ら中道を得る事の難きなり。說者省みざるべからず。

。我れに幾許の收入あるか、我が年齡は幾才なるか、我が身分は何物なるか、我が肉體は强か弱か、我が智慧はどれほど迄に働くか、以上の五ヶ條は常に猛省せざるべからず。

。分を知るとは、如上の事を知ることである、これを顧みるときに我が實力が確認され、これを守るとき安住の奧地に遊息す。若し夫れ、寸時にても之を忘れて其の圈外に脫出するときは、忽ち空想の奴隸と成り、煩悶の深淵に沈淪し了るべし。吾人は分を護つて、而も進一步せざるべからず。

病父曰。世に分限を守ると云つて、徒らに偏狹頑癖に陷る人あり、斯かる人は多くは世に容れられざる孤立者と成る。余の實驗に依るに、昨日の分限は今日の分限に非ず、今日の分限は明日の分限に非ず、人生の分限は恰も草木の成長するが如く、其の日〳〵の分限に應

じて身を守るに在り。然る時は進步の世に伴ふて早晩、昔日の小分限が遂に他日の大分限と成ることを得る。

。他人が馬鹿と罵つたとて、大變に立腹する小膽者がある。これ眞に馬鹿の骨頂である。

。我れに一點の失行なきに而も他人が馬鹿と罵つたとすれば、其の時は罵られた者よりも、罵つた者が馬鹿である、我れに於て何等の關係はない。若し夫れ、我れに失行あつて他人が馬鹿

と罵つた時は、我れは感謝して其の注意を受くべきである、決して立腹すべき筈のものでない。

。斯う考へると、馬鹿と罵られたからとて、立腹すべき事は些少も無いではないか。然るにこれを憤(いきどほ)つて彼此れ云ふ者は、實に針の穴程の小膽者である。

病父曰。馬鹿とは世間、人を侮辱する常套語なり、然るに余は勤めて馬鹿と成らんことを望む。其の故は、我れを侮辱する人多ければ、我れを羨まず、嫉まず、依つて我れ此の侮辱の下に隱れて、靜かに志を達するの便利あり。然れども世間多くは、馬鹿と成つて志を達することを好まざるものゝ如し。

。己れの行爲は結果の善惡に拘らず、必ず一分の理窟をつけて、以て自ら慰む。之に反して他人の行爲は、斷じて理窟と辯解を許さぬ、刻下に解決を下し、窮追して死地に陷れねば止まぬ。

。願くは我れと他と、常に其の身を轉換して一考したいことである。すると必ず寛容の天地に出でらるゝものである。

病父曰。自他の間に於て悲喜苦樂の起る毎に、自他位置を換へて先づ熟考するときは、羨望嫉妬怨憎等の惡德に制せらるゝ憂少なし。されど此の反省心を用ゐることは、恰も背水の陣頭に立ちたる一騎當千の驍將よりも尙ほ一層の勇氣無くんば、茲に至ることを得難からんか。

。人は常に自己の本務に思想を集中して分時もこれを忘却してはならぬ。本務に就ての要件を忘るゝやうでは、決して有爲の人物とはなれぬ。

。學生にして教科書を忘れて登校する者、僧侶にして念珠を忘るゝ者、實業家にして計算を忘るゝ者の如きは、假令へ如何程才氣と辯口があつても、決して一角の人物と成れるものでない。

。本務を忘るゝ者か否かと云ふことは、人物考査に就ての最大要件である。

病父曰。太陽の光線を玻璃鏡を通して集中せしむるときは火を生ず、人も自己の本分に專心一意集中するときは、所謂天地も感じ、鬼神も泣く底の勢力を生ずるものなり。

。人格は求心力で、行爲は遠心力である。既に求心力であるから、如何なる些々たる行爲の上にも、其の人格上の異彩が放たれてをる。

。遠心力の性質を帶びたる行爲は、八方に放射する傾きがある。人が各種の方面に發展の欲望を有するはこれが爲である。

。崇高なる人格の中心が缺けてをると、一切の技藝も必ず無意義に沒了すべし、されば勉むべきは人格の養成であり、技藝は第二義である。

。圓滿なる人格の異彩は、われ之を世尊の行爲に認む。我等は常に此の人格に向つて進まなければならぬ。

病父曰。人格養成論流行して、少しく志あるもの人格を論ぜざるなし、其の論たるや古人の金言格語を以て恰も石小詰の如く責立つるの風あり、こゝに於て其の弊や、自ら半文の價値なき身を以て、古德の人格を彼此れと批議するに至る。余は思ふ、人格は徒らに論ずべきものに非ずして、默々の間に修養するものなりと。如何。

。專門の學科を右の手に持つと共に、專門以外の學科を左の手に持つことは、生活上最も必要なることである。

。人は右の手のみを使ひ通しにすることは出來るものでない、時には之を休めて左の手で用足しをせねばならぬ事がある。此の時に當つて專門以外に一藝も持たぬ者は、ハタと行詰つて當惑を極め、心ならずも出所進退を誤ることがある。

病父曰。山本勘助は兩刀遣ひの達人なりと云ふ。然れども人徒らに之を擬せんとして自ら我力量をかへりみざるときは、所謂、一も取らず二も取らずと云ふ恐れあり。古語に萬能よ

りも一心と云ふことあり、專門の要は唯一事を爲すのみに非ず、其の熟達にあり、而も熟達して後、餘裕あれば學ぶも可なり、一概すべからず。

。青色の眼鏡で外界を觀むると、萬物悉く青色を呈し、赤色の眼鏡をかけると眞赤と成る。

。世に絶對の惡も無ければ、亦絶對の善も無い。從つて賢者に千慮の一失あれば、愚者にも亦一藝の取得がある。

。されば吾人は眼鏡の色に騙されてはならぬ、須らく眼鏡を脫して其の眞相を徹視する底の識見を養はなければならぬ。

病父曰。其の眞相を徹視するの眼鏡とは何ぞや。曰く、無色淸透の慧眼なり。殊に宗敎家たる者此の慧眼を明かにすべし。

。寒いからとて夜着をつけて街路には出られぬ、熱いからとて赤裸で道中は出來ぬ。幾等自然派だからとて、直情徑行は出來無いではないか。

。地には千草萬木雜然として繁茂するも、而も各々其の所を得て餘りに他を侵害せる跡を留めてをらぬ。天には星辰千萬相懸るも、而も各々其の軌道を守り、其の位置に安んじてをる。

。自然の妙趣は、不規則の中に規則あり、不取締の中に取締のついてをる處にある。彼の重箱の隅を揚子でほぢくるやうな事は、斷じて之を稱讃することは出來ぬも、而も亦直情徑行を以て本能とし、世と人とを顧みざるが如きも、我は斷じて執ることが出來ない。

病父曰。近來自然主義が世に流行して、小學の兒童にまで其の弊害が波及しかけたと聽き及ぶ。由來此の傾向あるは生存競爭の結果、一頭地を拔きて早く成功を期せんと云ふ野心より生ずるものか。それはともかく、人々家庭の敎育上に深く注意せずんばあるべからず。

。徒らに職務に追はれて自修の時間なしと辯解する勿れ。一時間早起して一時間遲く就眠せよ。是れ天が汝に與へたる課餘の時間なり。斯くして勉むるときは、一ヶ年に能く二ヶ月の日子を生み出すべし。

。社會の競爭場裡に立つて、事を爲さんと欲する者は、勉めて課餘の時間を善用せざるべからず。

病父曰。睡眠の時間を割かんと欲せば、就寢後直ちに無心熟睡の習慣を作るべし。然れば睡眠の時間少なしと雖も、茲に自然の休養を得る、これ余が多年の實驗なり。

。汝は何んの爲に讀書するか、これ一考すべき問題なり。此の問題を定めずして徒らに讀過するときは、恰も目的無き旅の如く、一事の得る所無くして徒勞に終るべきなり。

。されば開卷第一、先づ其の目次につき汝の望む所の題目を撰べ、かくて其の條下を讀了し、茲に冥目して汝の意見と著者の意見との如何を比較せよ。彼若し高くば直ちにそれに從へ、卑ければ用ゐるに及ばず。滋養物を取るが如くせよ。

。讀むは善きも、讀まるゝは惡ろし。讀む者は己れの意見と比較するも、讀まる者は唯夫れ盲從を事とす。

病父曰。讀書の亂讀は古來學者の戒むる所、又批評眼無き讀書は讀書の要領を得ず。然れども唯徒らに高慢貢高の心を以て批評と罵詈の簡別無き者は、著者に對して尊敬を缺くの嫌ひあり。余は此の種の人に對して云ふ。苟も著者に對して眞正の批評を下さんと欲せば、自ら著述を以て反駁すべし、實に言ふは易いが、書くはむつかしい。

。立腹は明日に延ばせ。稱讃は其の場に致せ。

。命令は與へても、手段にまで立入つて干渉すな。

。稱讃には辭(ことば)を惜しむな。立腹には辭を惜しめ。これ人を用ゐるの要訣なり。

病父曰。兵書に曰く、忿兵は敗ると。實に此の實行は、恩威併行の大度量ある者に非ざれば行ひ得ず。

。事の善惡に關せず、必ず二分の餘地を殘すことを忘るゝ勿れ。十分はやがて下り坂の缺目を生ず。

。世が淨土でない限りは、菩薩と惡魔との雜居は免れぬ。されば一人の善人の出來るのは即ち一人の惡魔の減ずることゝなる故、彼等の一類が烈火のやうになつて反抗するのは無理も無い次第である。それ故此の邊の事に就ても、二分の餘地を殘すことが肝要である。皮を剝ぎて骨までも碎くと云ふ主義は、何につけても面白からぬ。

。二分の餘地は他に對しては寬容の美德となり、自己に對しては反省の好壇場と成る。

病父曰。余嘗て先考に聞くことあり、窃盗の改心者先考に對し、盗難を避くるの秘訣を說けりと。其の言に云はく、若し窃盗の入り來らば、腹痛に擬して家族を起すべし。若し又これを追はんとならば、先づ逃げ道をあけて後、聲を以て追ふべし、然れば難なしと。

。譬へば雄猫が雌猫の尻を逐ふが如く、何事にも隨いて廻るな。隨逐の煩惱は必ず自己の本領を滅却せしめねば止まぬものである。

。衣服に隨いて廻ると、屹度着倒れとなる。飲食に隨いて廻ると、屹度食倒れとなる。萬事悉く然り。

。分に安んじ、主義を守り、それ以外の虛榮に眼をくるゝ勿れ。かくて始めて安住の樂地に逍遙することを得べし。

病父曰。物に轉ぜらるゝと、物を轉ずるとの分界線は迷悟昇沈の分るゝ所、學道の用心も亦茲に始まる。

。譬へば碁を圍むが如し、勝敗に執着するがゆへに常に全局を徹視するの明を缺き、思ひもよらぬ失敗を招く。

。唯夫れ岡目八目なり、胸中一點の執着無きが爲に、能く己れの力量を顯はすことを得る。

。執着は常に事物の眞相を觀破するの明を覆ふ。世尊我れに敎ゆるに不着の妙訣を以てせらる。考慮せざるべからず。

病父曰。執着の念を去ること、恰も水鳥の水に入りて而も水に濡れざるが如くせば、遂に怨親平等の佛心に近づくことを得べし。

。一寸先も見へぬ暗夜に、道にて衝き當ることがあつても、雙方共に腹を立てはせぬ。若し夫れこれが白晝であると、仲々只では濟まさぬ。

。暗室の中では、幾等手慣れた事でも、思はぬ不覺を爲し、斷じて白晝の時の如く、百發百中と云ふ事は出來ぬ。

。人生は光明土で無い、此處は無明長夜の世界である。從つて衝突と間違のあるのは當然である、我れ是れを思ふ毎に、他人の所作に對して、腹も立たねば、又己れの行爲に就て、自慢の鼻も突き出ぬやうになり、不言の歡びを得る。

病父曰。某盲人曰く、私は幼年已來老後に至るまで、杖一本によつて大小の通路に於て躓きたることなし。然るに眼あきの人夜中提燈を携へて尙ほ躓くことありと云ふ、笑止千萬なりと。此の意、味ふべし。

。腸胃が健全であると、好食粗食の區別なく、何を食しても能くこれを消化す。慈心溢るゝときは、好惡の差別は跡を絕ち、孰れに對しても愛愍の溫情のみが湧起する。

。食物の小言を云ふは、腸胃が弱いからである。差別の念の強さは、佛心が薄きが爲なり。恥づべきの至りなり。

病父曰。余は多年、病床にあつて此の理を實驗す。眞に然り〳〵。

。食ふ程の物が、悉く滋養分と成るものではない。其の大部分は不必要として排泄せらる。

。されば見聞覺知の事が、悉く氣に入ると云ふ譯に參らぬのも當然である。吾人は其の中より滋養の物を吸收しさへすれば良いので、別に改めて愚圖々々と小言を云ふにも及ばぬ。

病父曰。余多年、病床に在つて身體の生理上、滋養成分と排泄物流通の利害得失を實驗するに、實に排泄物の過不及は病狀の變化に關係すること甚だし。余は常に大小二便の適度を得る毎に獨言して曰く、ア、嬉し〳〵と。之と同じく人々に當つて私情偏見を自ら快よく排除するときは、遂に天下に敵無きに至るべし。

。生れ出る當初の厄介、既に他人の手を煩はす、死に去るの最終、亦全く他人に賴る。吾人の一生は他人の世話で往來してをる。

。然るに生存の中間に於て、念頭毫も利他の思ひ無く、出頭沒頭唯夫れ自利を事とす。謬れるも亦甚だしきかな。

病父曰。他力と卑屈と、獨立と孤立とを簡別することを得ざる者、此の謬りあつて而も公共心を無視するの弊あり。

。飢寒の苦しみを受けて斃れる者よりも、飽食暖衣の裡に夭折する者の方が澤山である。

。されば警戒の要は、逆境よりも寧ろ順境に伏在す。

病父曰。外患は禦ぎ易く、內患は禦ぎ難し。佛教の衰亡も多くは獅子身中の蟲に起因す。豈戒めざるべけんや。

。碎けた茶碗を取上げて、彼れに愚癡を零すやうな者は、兎角に末の見込みなき厄介物なり。何を以てか。大切なる腦力を無益に徒消するが爲なり。限りある腦力を無益に使ふてはならぬ、最もこれを有益に使用せよ。茶碗の破れに氣を腐らすよりも、新らしき物を求むる方を考へるべきが大切なり。人間萬事悉く然り。

病父曰。碎器を取上げて愚癡を零す者は厄介者なり、殊に自ら良器を碎破して顧みざる者は尙ほ一層厄介者なり。

。王位を捨てゝ一代を衆生濟度の爲に投じ給ひし大聖釋尊は、實に椽の下の力持ちを爲された方である。

。藤原氏の榮華を捨てゝ、九十の人生を行旅に果し給ひし親鸞聖人も、亦椽の下の力持ちを爲された方である。

。己れを忘れて他の爲に盡す、是れを椽の下の力持ちと云ふ。世人多くは之を貶して馬鹿の骨頂となす。而も偉人は常に此の事に全力を盡す、考慮せずんばあるべからず。

病父曰。世人多くは高名を賣らんがため、何事を爲すにも針小棒大的に誇りとするを喜ぶ。然れども皮想の誇大は永く持續せず。余は常に云ふ、苟も事を爲さんと欲するならば、屋上の瓦と成らんよりは棟木と成れ、大黑柱と成らんよりは床の下の根底柱と成れ、常に人に見られずして、而も家屋を持つこと却つて大切なりと。

。何事も覺悟一つなり。覺悟のある所銅貨大の灸も平氣で辛抱が出來る。若し夫れ覺悟無き時は、マッチの飛火にも六尺の大漢がアッと叫ぶのである。

。雖一世勤苦、須臾之間、後生無量壽佛國、快樂無極とあり。佛願力の不思議に覺悟が出來ると、能く貪瞋の煩惱に對しても、反省の灸の辛抱が出來るものなり。

病父曰。人一度覺悟する時は、元氣充實して別人の如くなるものなり。譬へば優柔の婦人が主人の使として日中山道を通るを恐れながら、自ら秘密の事件あつて其の目的を達せんが爲には、日中恐れを抱きたる山道を、夜中人目を忍びて通行するを得るは、即ち覺悟一つにあり。武士の覺悟も亦此の如し、とは家康公の遺訓なり。

。一年三百六十五日、雨つゞきもなければ又晴つゞきでもない。晴と雨とは必ず交謝す。されば雨が降ると小言を云ふに及ばず、晴れたからとて飛立つて歡ぶにも及ばぬ。我等は晴雨の如何に拘らず、我が目的の道途を進まねばならぬ。

。人生の苦樂も亦夫れ晴雨の如きである、悲喜苦樂は一生を通じて往來交謝す。從つて吾人は其の一方に執着して泣くにも及ばねば、又歡ぶにも足らぬ。

。大觀すれば人生の一代は、恰もかの三百六十五日の天候の如きである。

病父曰。一天雲無く晴渡りたる大空を眺めては、いかなる者も今日は好天氣なりと快呼す。一念無我の大信を獲得したる者は、心常に邪惡の念に障へられず、日日好天氣の心持にて此の生存競爭の中を安樂に渡ることを得。豈慶ばしからずや。

。恩惠は無條件の上に成立すべきものである。恩惠を施してそれに對する報謝を要求するときは、明かに恩惠の範圍を脫して他に對して報恩を强ふる事となる。

。されば如何なる恩惠的行爲にても、一念他日の報恩を欲望するの思ひあるときは、其の刹那に忽ち僞善の行爲に陷るものと自覺せねばならぬ。

病父曰。眞に然り〳〵、余多年の實驗上これを知る。余嘗て某老師に聞くことあり。同師の許に永く仕へたる老僕あり、故あつて辭し去るとき、僕の曰く、永く恩惠を蒙つて之を感謝するに道無し。然れども、せめての事に生涯を期して恩を仇で報ひる行爲はなさじ。と

誓言したりと、此の辭味ひある哉。

。世に處せんとするには、虚言の一つも吐き、心にも無い追從も云はねばならぬ。されば とて道に進まんと欲するには、斯樣の心掛けにて日送りするは誠に心苦しい處がある。此の間に處するの法如何と問ふた者がある。

。是に答へた。それは左程に心苦しいものでは無い。私は思ふ。虚言を吐きて少しも恥とせざる者は、人中の下品なり。虚言を吐きて之を恥と知る者は、人中の中品なり。虚言の罪惡を自覺して毫末も之を犯さゞる者は、人中の上品なり。我れ人中の上品と成らんか、はた下品にて終らんか、是れ人格の別るゝ所なり。此の分別は自ら處決すべし、斷じて他人の補けを俟つこと勿れ。

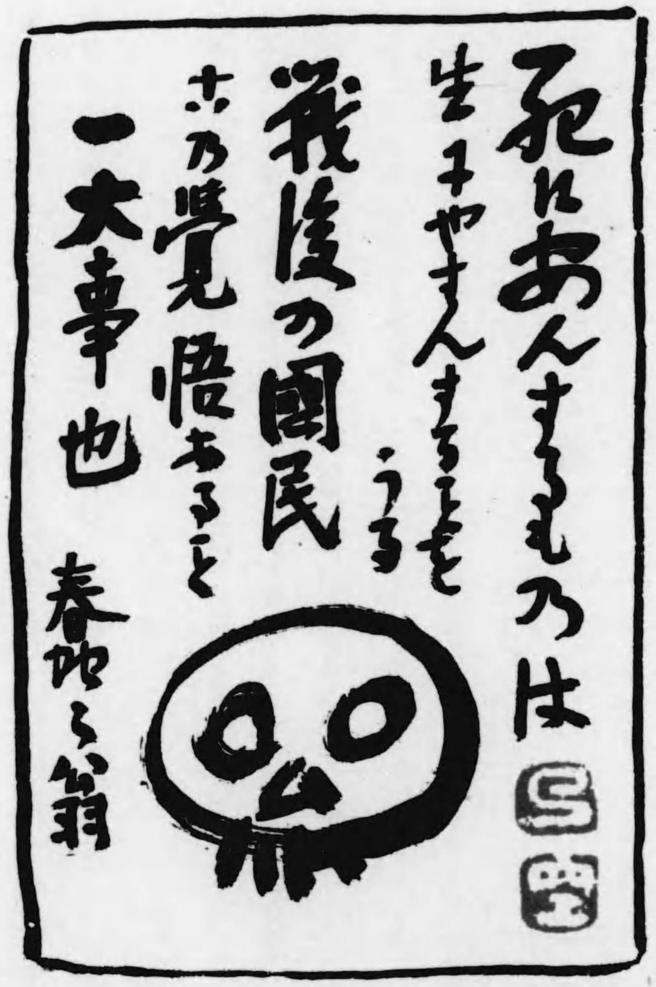
。彼の心苦しきを感ずるは、下品の行爲を爲して、而も上品の名聲を博せんと欲するがためなり。吾人は決してかゝる不合理に驅使せられてはならぬ。

病父曰。眞に然り〳〵。此の分別の歸する所、念々生滅の心頭初一念に在り、この一念の分界線は自己をして天に登ると地に落るとの別を爲す。心常に先見の明無き者、此の機微の間に生涯を誤るものなり、注意せずんばあるべからず。實に此の機を守るは修養の如何にあり。

。自由は、自他の滿足の上に於て自己の意旨を遂行すると云ふ範圍内に在つて、始めて得らるゝものである。若し夫れ之を破つて自由を求めんとするときは、刻下に專横の領域に立ち入ることゝなる。

。自由と專横とは似て非なるものである。自由の天地に和樂常に往來するも、專横の天地には惡魔棲息し、常に悲慘血涙の源泉となる。注意せずんばあるべからず。

病父曰。身常に道を行ひ、心常に徳に進む者、自ら求めずして自由來る、これ眞の自由なり。



三宗教

。飯は腕にて食ひ、腕は信仰に依つて動くべきものなり。斯くて始めて佛を賣らずして、佛の徳を讃仰する者となる。

。信仰は人に賣る可きものに非ず、自ら樂しむべきものなり。

病父曰。自ら樂しむ固より可なり、尙ほ人と共に樂しむに至つては一段の風光あり。然るに若し是を省みざるときは、所謂聲聞根性に陷るの怖れあり、心すべきなり。

。年中いつも快晴ではない。雨も降れば、風も荒れ吹く日がある。

。人の一生も亦それと同じく、いつも思ひ通りには行けぬものである。雨具の用

意大切なり。宗教は傘なり、合羽なり。これあるに依つて吾人は苦難の風雨に苦しむことなく、其の日〳〵が送られる。

病父曰。粗製の傘合羽は大雨に堪へず、茲に一層の注意を要す。

。正定聚と滅度とは、一益ならずして二益であるとは、經文の明示する所にして、又蓮師の斷言せられたる所である。

。今の眞宗の教徒、如來の大願を單に往生成佛の一益に限られたるが如く感じて、他の正定聚の現世の利益を等閑視する嫌ひあり。これ眞宗の教が當に振ふべくして、未だ大いに振はざるの一大原因ではあるまいか。

。正定聚不退轉と云ふことは、眞宗教徒の大いに研究を要すべき問題である。否、大いに宣傳すべき利器であると考へる。

病父曰。現生正定聚の益は念佛行者の品位を示すものにて、所謂、人爵の高位高官の比に非

ず。苟も身彌勒に齊しき品位を獲る者、何ぞ人生一代の人間美德を全ふせんことを期せざらんや。

。一度歩んだ岐路に立ちて、其の執れを取るべきかと迷へる時、人に尋ねて其の道を教へらるゝも、尙ほ多少の疑惑心裡に往來するを免がれぬ。

。未だ知らざる岐路に立つ時、人に教へらるゝと、一點の疑惑も心中に浮ばず、直ちに其の道を進み得る。

。信仰は未知の道路を進まんとする時の指示である。吾人は之に對して疑惑の念の生ずべき餘地を有すべき筈が無い。然るに法を聞いて法を信ぜず、佛を賴んで佛を疑ふ。自ら云ふ、未だ一分の疑ひが晴れかねると。誤れるの甚しきかな。此の如きは未だ信仰の性質を諒解せずして、徒らに其の墻覗(かきのぞ)きを爲して、堂奥の眞相を握取せんとするが爲なり。尤も大疑のもとに大信ありと古聖も云はれてをる

から、此の疑惑を轉廻する所に光明は認めらるゝ。大膽に信ぜよ、言はるゝがまゝに從へ、これ入信の第一義諦なり。

病父曰。指示の要、機教相應するに在り。然るに教に大小二乘あり、機も亦大小二乘の機あり、されば如何に至誠を盡して指示するも、機緣純熟せざれば信ずることを得ず。故に四十八願にも方便の願あり、眞實の願あり。蓮如上人は、宿善無宿善の二つを分別して教化せよと指示せられてをる。道を說く者此の點の考慮を要す。

。生前を始めとし、死後を終りとするときは、生存の現在はその中間に當る。

。吾人は吾人の生前に關して一事を知らず、全く暗黑なり。吾人は吾人の死後に對しても亦一事を知らず、全く暗黑なり。暗黑より出でゝ暗黑に入る、中間の明白なるべき理なし。自ら以て大いに知れりと誇るものは、自ら以て自らを欺くものなり。是れを以て有道者は常に自ら稱して愚癡と云ふ、味ひあるかな。

。如來の光明は茲に其の必要を認む。讃に曰く、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、と。吾人は如來を信ずるに依つて、始めて暗黑の人生中に一道の光明を認むることを得る、仰ぐべきかな。

病父曰。吾人は生前死後を知らざる無明暗愚の癡漢なり、否、念々生滅の前後だにも知らざる暗黑者なり。然るに本願を信受する一念の端的に、前念命終後念即生の大益を蒙ることを得、これ即ち人生の活路を得る所以なり。

。身は四百四病の容器である、從つて何人も病を免ることは出來ぬ。

。心は八萬四千の煩惱の棲家である。從つて我等は常に此の心病の爲に苦しまさるゝものである。

。肉身に病ありとて恐るゝには及ばぬ、適當の醫藥だにあらば、容易に病魔を征服して健康の樂天地に出づることが出來る。

。心に煩惱ありとて苦慮することは要せぬ、如來は大醫王にして念佛は不死の神方である。吾人は此の神方によりて不斷煩惱得涅槃の妙境に逍遙することが出來る。

。病を恐るゝ者は良藥を知らざるが故なり。人事の煩累を恐れ、徒らに煩悶苦惱する者は、念佛の妙法を解せざるが爲なり。念佛の樂天地には煩悶は無い、苦惱は無い、見聞覺知悉く慶喜の種と成る、これを不退の妙境と云ふ。

病父曰。言ふは易く、行ふは難し、身心の二病を恐れずして、此の妙境に達する者は天下幾人あるか。

。十方衆生の招喚の下には、一人として惡むべき者が無いことが顯はれてをる。而してこれが即ち佛心である。

。されば好惡の念の深い者程、佛心と遠ざかつて惡魔に近い者である。戒懼せずんばあるべからず。

病父曰。頭大の獅子面を被つて童子を脅す如く、尊大の佛者を粧ふて世と人とを誑惑する者は、則ち佛魔と稱すべき乎。

。魔性の人は好んで人の非を見、常に破壞を喜ぶ。此の種の者の優秀なる者は、革新の旗振りと成り、其の小なる者はコセ〳〵と小言を云ふて、常に人の反對に立つ。

。佛性の者は好んで人の長所を見、常に建設を喜ぶ。此の種の優秀なる者は天下の救濟者と成り、其の小なる者はお人好しとなつて、常に他に翻弄せらる。

。我は寧ろ後者にくみせんか。

病父曰。此の迷界に於て圓滿完全の人を求むるは至難なり。されば人々自他の長短を相補ふて、人生の快樂を極むること必要なり。而して此の兩道の別かるゝ所は、則ち心頭一念の初起如何に依るものなれば、各々自ら省みる所無くんばあるべからず。

。惡人正機とは佛の方より云はるゝ辭であつて、我々凡夫の口幅廣く云ふべき辭ではない。

。病身の子が可愛とは親の慈愛であるも、さりとて病氣に罹つて親に可愛がられやうと思へば、大變な間違となるべし。

。吾人は此の點に就て深く考慮しなければならぬ。

病父曰。改悔懺悔の本心なき者は、天下滔々此の誤りに陷る者なり。

。上は法を聞く、中は辭を聞く、下は人を聞く。人を離れ、辭を離れ、唯法を聞け。されば隨處に我れを導く大善知識あり。

。是れは聽く者に對する注意なり。若し夫れ法を說かんと欲する者は、因人重法の金言を忘るべからず。

病父曰。法を聞くは善し。然れども得手に法を聽かば却つて聽かざるに勝る害あり。依つて唯能く法の如く明らかに聽くことを要す。

。如何なる場合に在つても、煩惱は食客にして念佛は後繼ぎ息子なり。吾人は其の待遇上に明確なる區別を爲さざるべからず。食客に忠義立てして、後繼ぎ息子を苦しむる者は、馬鹿の骨頂なり。

。世間で負けても、佛前で勝て。これ後繼ぎ息子の爲なればなり。

病父曰。食客は大概主家を思はず、却つて食潰して、後尙ほ主家を誹る風あり。煩惱の食客も亦常に出世の聖財を食潰して尙ほ足らず、遂に泥梨に沈ましむ。恐れざるべけんや。

。煩惱は砥の如く、念佛は劒の如し。兩々相磨して、茲に始めて秋霜の如き白刃を錬成す。

。されば徒らに煩惱の苦しみを訴ふること勿れ、やがてこれ汝の念佛を錬成する好壇場となるべし。我れ此の理に想到するとき、煩惱の渦中より脫出することを得、歡喜極りなし。

。經に曰く、煩惱菩提體無二と。味ひあるかな。

病父曰。古語に、銹びて腐らんよりは寧ろ磨いて減らすべしと云ふことあり。懈怠の煩惱に銹びて、永く迷界の腐敗物と成らんよりは、磨いて迷界を脫却するに若かず。

。僅かの時間、佛前に端座して念佛する間にも、忽ち千態萬樣の妄念往來し、口と意と各別となり、殆ど慚愧に堪へぬと喞つ者がある。

。然れどもこれは左程に心配するに及ばぬ。鏡の前に立つと、いつでも顏の汚れが目立つ。如來の大圓鏡智の前に向ふが故に、能く我が散亂麁動の心中を照破せらるゝのである。而も如來はかねて煩惱成就の凡夫と知らしめて大願をお建てなされてをるが故に、我等は心中の散亂を歎くには及ばぬ。妄念の起るにつれて、愈々自己の無力を知つて、ひとへに如來の大願力に乘托すべきなり。

病父曰。眞に然り〳〵。

。油は晝の中に注ぎをき、燈火は夜に入つてつけよ。佛前は信念の油の注ぎ處なり、臺所は行業の火をともす所なり。

。教壇の下にて如何程殊勝氣に稱名念佛しても、家庭に在つてむつかしやの大將と成り、家族を苦しめるやうなことでは駄目なり。此の如きは油を注ぎながら火をともすことを忘れたるものなり。ともさぬ油は注がぬも同樣なり。

病父曰。今日の世、油の尙ほ盡きたる者多き乎。悲しい哉。

。一度聞法して諒解したる上は、改めて再三再四聽聞するに及ばぬでは無いか、と云ふ者がある。是れ一を知つて未だ其の二を知らざる謬論なり。

。譬へば入浴の如し、一日之を廢するときは、一日の垢を殘して其の身を汚す。

。聞法は垢を流す入浴の如し、嗜み深き者は常に之を使用することを怠つてはならぬ。我等穢惡汚染の凡夫、流す下から煩惱の垢が出る。是を以て聽聞は一代を通じて爲すべきの要あり。

病父曰。入浴の要、汚穢を洗除するにあり、然れども入浴して其の要を怠る者は尙ほ垢を止むるあり。一代を期して聞法を事としながら、高慢貢高の心に驅られたる所謂法義者ありて、却つて宗義を亂すは甚だ以て慨嘆に堪へざるなり。

。引寄せて結べば柴の庵哉、とくればもとの野原なりけり、と古人は詠じた。柴の庵を常住に存在する物と思ひ、ひたすらに我が物顏に執着するを未覺の凡夫と云ふ。

。やがては元の野原となる物の、敢て厄介を見るべき價値なしとして、全く人事を等閑視する者、これを半解の小乘根性と貶す。

。庵の存在と其の破壞とを達觀し、而も全力を盡してこれが爲に勞苦する者、これを大乘の覺者と云ふ。

病父曰。今日の世、偏狹の道德者大概この弊に陷るの傾きあり。余常に云ふ。道德と云ひ、道義と云ひ、共に道を行ふの名稱。されば苟も道を行ひ、德に進まんとならば、萬難を排

して進取するの氣慨心無くんばあるべからず。これを古德の行蹟に質せば、其の證明少なからず。

。春衣盛裝の朝は、雨と泥とを避ける、身を汚さんを恐れてなり。

。既に正定聚の分に入る者、如何んぞ三毒の煩惱中に晏如たるべき。

。煩惱を自慢するな、煩惱を恥ぢよ、これ如來の子たるべき者の當前の勉めなり。

病父曰。恥を知るは勇に近し。然るに我々凡夫は無慚無愧を以て心地とす。口に恥を語りて、心に恥ぢず。心に恥を知つて、口に語るを欲せず。二者共に謬れりと云ふべし。然るに近來世に懺悔錄なるもの流行し、懺悔を賣つてパンの補給とす。此の如き懺悔は眞に勇氣ある懺悔に非ずして、自己の嘔吐物を再び食ふが如きもの乎。何ぞ思はざるの甚しきや。

。一日速く佛を知りたる者は、能く一日の先覺者なり。

。先覺の位置に立つ者は、未覺の昏迷者を覺醒せしむべき義務を有す。斷じて彼の未覺の睡者と共に春眠を貪ることを許されぬ。

。然るに何物の癡漢ぞ、敢て念佛を稱へながら、徒らに三毒煩惱の睡者と共に前後を爭はんとする。謬れるの甚しきかな。

病父曰。天下此の義務を盡す者、幾人あるぞ。噫。

。劇場の觀客は、泣くも笑ふも、役者の所作のまゝに從ひ、我が身の上を顧みる暇がない、全く己れを忘れてをる。

。如來の大演劇を觀よ、舞臺より眼を離すな。茲に始めて如來の偉大なる恩惠に浴することを得べし。

。舞臺を離るゝが故に退屈が出る。如來を忘るゝが故に、煩惱が角を出す、吳々も役者の藝のみをみつめることが肝要なり。

病父曰。忘己々々、至心信樂己れを忘れて無行不成の願海に歸し奉る時、業に己に永劫生死に流轉する罪惡の根元を斷絶せしめらる。余は肺病十三ヶ年、轉氣移神の養病法を實行し來れる由來も亦茲に在り。

。半日能く十里の道を歩ゆんだとて、親はさほどに歡びはせぬ。親の歡びは障子にたよりて、一歩々々と歩み出した時に在り。

。高徳の聖者は、半日十里の健脚者なり。不徳吾人の如きは到底其の道伴れとなることは出來ぬ。而も如來は敢て之を咎め給ふことは無い。聞信の一念に欣求淨土の希望の崩せる時、如來は雙手を擧げて吾人の廻心を歡び給ふなり。

病父曰。兵法の語に、一歩を進めば山を越ゆると云ふことあり。聞信の一念に一歩を進めば遂に如來の家に入ることを得せしめらる。あゝ樂しい哉。

。一柱の線香の光も、尙ほ能く方丈の室に一道の光明を與ふる德を有す。

。三毒煩惱の暗に閉されたる吾人の胸中にも、一念の念佛は確かに開悟の光明を傳ふるものなり。淨土門に在つては、理窟よりも念佛が肝要なり。

病父曰。直線は數十丈引くとも、同じく直線にして底止する所を知らず、而も寸分に斷ちても同じく直線なり。曲線は引けば引く程曲つて縮小圓環の體と成る、假令へ之を寸分に斷つと雖も、同じく曲形なり、理窟裏に呻吟する念佛者は常に曲線の如し。無我の念佛行者は本願一實の大道を直行すべきなり。

。十疊の廣間に入れられて、一日其處を出るなと云はれると、此の上も無き窮窟を感ずる。之に反して、劇場では半疊敷の場所で、三人も四人も詰め込まれ、終日坐り通しであるが、而も何人も窮窟を訴へぬ。却つて面白がつて歡ぶ。

。窮窟は部屋の大小に依らぬ、心の置處一つに在る。佛法は氣の詰まるものかと

思へば、信心に御慰み候。との先德の敎誨は、實に無限の味ひがある。

病父曰。八疊敷の座敷にて二間の槍を使はんとする者は窮窟を感ず、二間の槍を使はんとならば、廣場に出づべし。佛の敎を信ずる者、自己の力量を省みざれば、遂に理窟裏に入りて窮窟を感ず。由つて自らの力量の足らざるを顧みて、如來の廣大の御心に同心する時、心常に淨土に遊ぶの感あり。是に於て生死悠々己れを忘れて、苦中樂を求めずして而も來る矣。

。心、三毒の煩惱を離る、これ佛心なり。之を善心と云ふ。

。心、三毒の煩惱に纏縛せらる、これ凡心なり。之を惡心と云ふ。

。顧みて思ふ、吾人は如何にしても四六時中、三毒の煩惱より離脫すること能はざるものなり。從つて吾人は如何なる善行美事を勉むるも、如來の前には到底惡業の凡夫たること免る能はざるものなり。

。親鸞聖人は仰せらる、虛僞諂曲にして淸淨眞實の心なし、と。寔に故あるかな。

病父曰。世の善惡標準論者、此の佳境に入る者幾人ある乎。

。漬物の押石は重い程結構なり、輕るければ忽ち酸味を來して不用に歸せしむる恐れあり。

。如來の前には極惡深重の徒者(いたづらもの)として頭を押へらる。吾人は此の押石あるが爲に、我慢の角も折れ、我身の鼻梁も碎かれ、やつとのことに恭敬の心に住することが出來るのである。有難いかな。

病父曰。飲食物に酸味を生ずるときは、遂に腐敗に歸すること常例なり。吾人凡夫は心常に煩惱の酸味を生じて出世の善根を腐敗せしむ、之が防腐劑としては怨親平等の佛心を體して、心常に自思反省の境に住する時は、此の憂を免れらるゝことを得る。豈思はざるべけんや。

。自分の言分を立つると他が迷惑す、さればとて他の辭のみに從ふことは、自分に於ても堪へ難き苦痛あり。斯かる際自分と他と其の孰れに從ふべきか、迷はざらんと欲するも得べからずと喞つた者がある。

。是れに答へた。それは左程に面倒な問題ではない。思ふに水の中に沈んでをる者が、空中の事を彼此れ云ふが故に、其の適歸する所を失ふと同一にて、吾人は人間同士の間柄にてこれを解決せんと欲するが故に、忽ち迷妄の雲に閉さるゝのである。一旦此の範圍の外に出でゝ、是が解決を求めんか、忽ち其の結歸すべき要點が捕足せらるべきである。

。範圍の外に出づるとは如何。曰く、如來若し出現せらるゝならば、如何なる方針を執らるべきか、と再思一審することである。斯くする時は、公明の天地は忽ち眼下に展開せらるべきである。

病父曰。殿堂壇上の佛あることを知る者は多しと雖も、佛の攝取の心光中にある我れたることを知る者甚だ少なし。是れを知らざる者即ち迷妄に誑かさるゝなり。豈顧みざるべけんや。

。肉體が大事か。精神が大事か。

。人事が大事か。佛事が大事か。

。何事を行ふにも、先づ此の事を考へねばならぬ。斯くて吾人は其の大事なるものに向つて猛進せざるべからず。苟も此の考慮を缺きて、徒らに世潮に誘惑されて浮動する時は、假令へ終生勞苦すとも遂に一事を爲すことなくして世を終ることゝなる。

病父曰。此の四大事を一丸にして呑了する者が、眞精神の人物と成ることを得べし。

。事業の形式が大であるからとて、それが直ちに善いとは申せぬ。又事業が小であるからとて、それを以て惡いとは申せぬ、吾人は形を執らずして、其の心を執らねばならぬ。

。如來の御心に叶ふ事ならば、假令へ如何なる小事業であつても、吾人は大なる事業として之を祝する。

。之に反して假令へ天下を驚倒せしむべき程の大事業であつても、其の中に如來の御心が忘れられてあるものならば、吾人は執るに足らぬ小事業として之を唾棄するのである。

。我等は事業の華美に眩惑されて其の批判を誤らぬやうに心掛けねばならぬ。

。如來の御心とは何んぞや。曰く、怨親平等の度衆生心是れなり。

病父曰。余曾て聽きしことあり、紙數の多きを以て一概に大作と云はず、假令へ半片一紙の文章と雖も、能く人の骨髓に徹し、且つ永く口碑に存するもの即ち大作なりと。

。風流を解する者は、花も喜べば若葉も歡び、紅葉も賞すれば雪も賞する。自然と推移して常に能く其の妙趣を解す。無風流者は、花を知つて若葉を知らず、紅葉を欣びて枯木を賞せず。これ未だ自然の妙趣を解せざるがためなり。

。如來の慈光に攝護せらるゝ者は、恰も彼の風流を解するが如きである。眼中一つとして法悅ならざる日なく、順緣に喜び、逆緣に喜び、隨處法喜を以て充たさる。偶に曰く、不斷煩惱得涅槃と、蓋し此の妙趣を歌嘆せられたるものなり。

病父曰。隨處法喜の風流は佛祖の風流にして、迷界超脫の眞風流なり。念佛の眞意を解するもの、貴賤上下を撰ばず、此の佳境に達することを得べし。あゝ樂しい哉〳〵。

一日一談（完）

昭和十六年三月二十六日印刷
昭和十六年三月三十一日發行

一日一談　奥付
限定一千冊　非賣品

不許複製

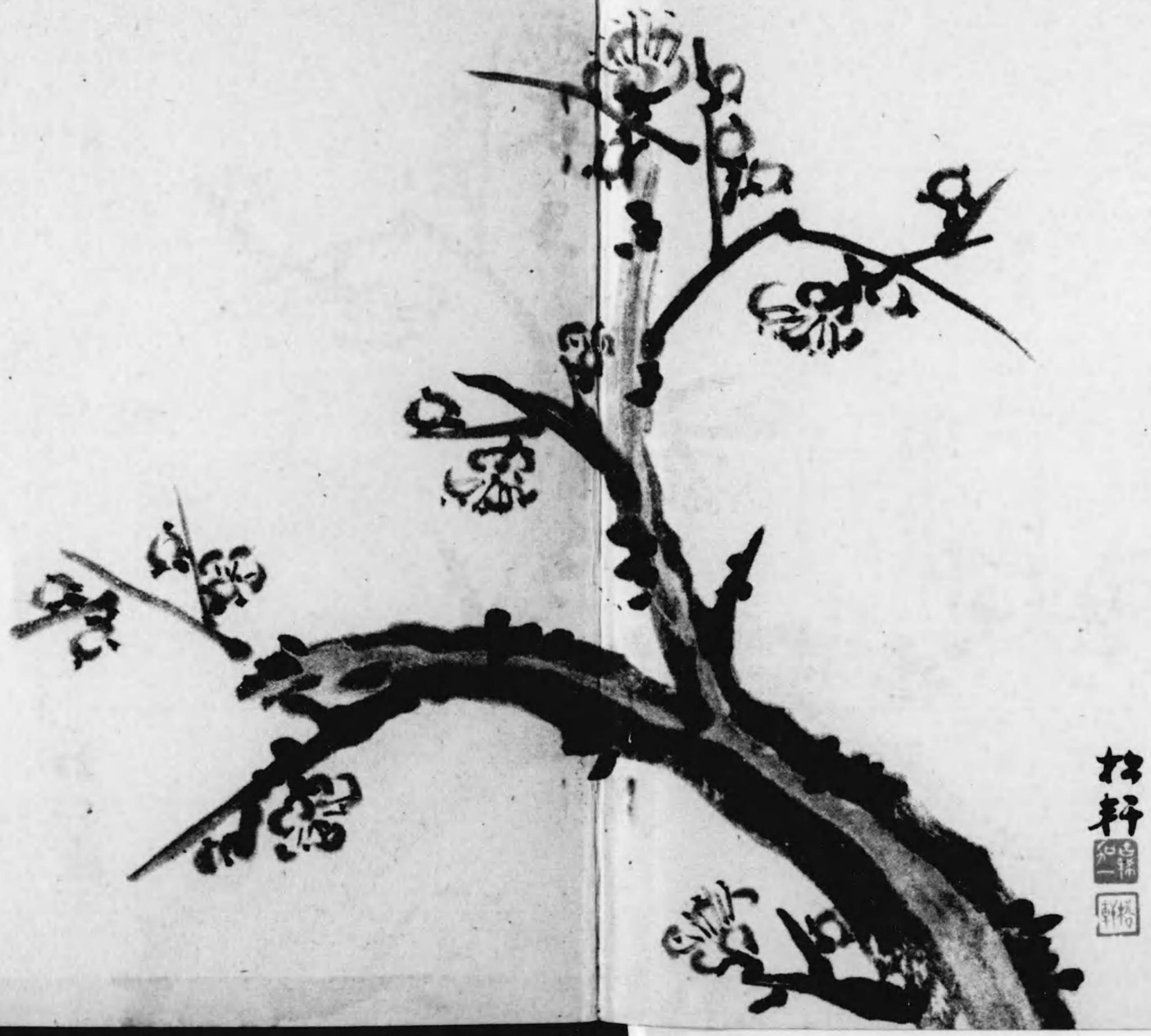
著作者　京都市上京區平野櫻木町九ノ二　河崎顯了

發行兼印刷者　名古屋市中區大池町五丁目一九　木津顯

發行所　東京市澁谷區上通り二丁目一番地
名古屋市中區大池町五丁目十九番地
破塵閣書房
振替名古屋一二五一二番

株式會社一誠社印刷

415
131



終